

2019 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	外国に繋がる子ども達への絵本の読み聞かせによる 身体動作 －幼児への母語及び日本語の絵本の読み聞かせ－
キーワード	①多文化保育、②絵本、③保育

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	マツヤマ ヒロ 松山 寛	所属等	足利短期大学 こども学科 講師
プロフィール	明星大学通信制大学院教育学研究科教育学専攻博士前期課程修了。2006～2012 川崎市役所に事務職として勤務、保育課や友好都市である大韓民国富川市への調査派遣等を経験。2012～2016 桜本保育園に保育士として勤務、多様な背景を持つ子どもたちのいる環境で保育を行う。2016 年から足利短期大学こども学科に勤務。 共著に「子どもの姿からはじめる領域・環境」(株式会社みらい)、「実践につながる新しい幼児教育の方法と技術」(ミネルヴァ書房)		

1. 研究の概要

北関東の外国人集住地区の保育園で外国語を母語とする子どもが言語形成期である1歳から2歳頃に絵本の読み聞かせを行い、子どもが読み聞かせた内容に応じてどのような身体反応をするかを調査した。その際、保護者による母語での絵本の読み聞かせを先に行い保育者による日本語での絵本の読み聞かせを後に行った場合、保育者による日本語での絵本の読み聞かせを先に行い保護者による母語での絵本の読み聞かせを後に行った場合、両方の言語で読み聞かせを同時に行った場合を用意し、それぞれの反応の違いを比較した。

研究の経緯について日本保育文化学会大会で報告を行い、保育文化研究第10号にて研究資料として掲載された。



2. 研究の動機、目的

2019年時点で日本には約280万人の外国人住民がいる。外国人の子どもの多くは日本の育児・学校制度の中で育っている。しかし、彼らが学習に必要な日本語能力を身に付けられるような教育環境は十分に整備されておらず、日本人の高校進学率がほぼ100%であるのに対し、外国人の子ども達の高校進学率は50%前後であるとされている。学歴を得られないことは当然その子どもの就職の選択肢を狭め、離職、失業、非行等の原因となる。

絵本を読むことは子どもの言語能力や想像力を高める効果があると複数の研究で明らかにされている。絵本による学習が外国にルーツを持つ子どもの日本語能力の向上に有効に使えるのではないかと考え、子どもに対して絵本を読み聞かせその反応を撮影し観察する研究を行った。

絵本の教育的意義、第二言語習得における絵本の活用についての研究そのものの数は多い

が、それを外国にルーツを持つ子どもの言語習得へと活用することについての研究は見られなかった。そこで、この研究では言語習得期にある外国にルーツを持つ子どもたちに対して母語及び日本語で絵本の読み聞かせを行い、子どもの言語発達への効果を検証することを目的とした。

3. 研究の結果

子ども達に対して絵本の読み聞かせを行いその様子を撮影して、子どもの発話や行動の回数を数えた。すると、以下のことが分かった。

保護者による母語での読み聞かせを2週間行った子どもは、絵本の読み聞かせに対して発話や反応の回数が増えていた。また、保育士による日本語での読み聞かせを2週間行った子どもは、絵本に登場する動物のマネをしたり、動物が登場する手遊びを行う等していた。母語での読み聞かせが子どもの理解に繋がる一方で、保育の専門家である保育士によってクラスの友達と共有した経験は子どもの反応の広がり深く関わっており、それぞれのアプローチの意味が確認された結果となった。

一方で普段から人前で話すのに慣れていない読み手が読んだ場合には子どもの集中力が続きづらい、子どもの性格によってはあまり反応がはっきりしないなど、同じ読み聞かせであっても読み手と聴き手の性質によって反応が違っていた。

4. 研究者としてのこれからの展望

今回の研究の中で非常に難しかったのは、研究に協力してもらえる対象の確保であった。外国人人口は日本人人口の約2%である。外国人人口割合の多い地域でも19%であり、約5人に一人程度である。保育園の乳児クラスは10~20人程度であるため、一つの園で同じ年齢の子どもは1から数人程度となる。今回の調査でも協力者を探すのに時間がかかってしまい、結果的には2歳児クラスが5人、1歳児クラスが2人のみの調査となった。

当該の年齢では子どもが体調を崩すことも多く、また南米では雨の日には休んだり、保育所よりも家族のイベントを優先する習慣があったりと、など日本人に比べて欠席をすることもある。結果として、調査を行った日に欠席していた子どももいた。

そのため、統計的な処理を行えるだけのデータを取ることはできなかった。今後、引き続き件数を増やしていくことで、研究の結果をより確かなものになりたい。

5. 社会に対するメッセージ

日本に既に300万人近くの外国人が住んでいて、この数値が増えることはあっても減ることは当面ないであろう。また日本で教育を受けた子どもは、日本に住み続けることが多い。この事実を考えれば、日本に住むこれらの子どもの教育は子どもたちの人権保護のために必要であると同時に、日本社会全体にとって重要な課題である。それにも関わらず、社会としてこの課題への取り組みはほとんど進んでいない状態である。

乳幼児への教育手段としての絵本の利用と言うのは以前から考えていたが、先行研究も少なくこれまであまり取り組むことができなかった。今回この若手研究者奨励金をいただくことで、設備面を整え研究に取り組むことができた。今後とも、多様なルーツを持つ子どもたちを含む中での就学前教育の在り方を模索していきたい。多大な支援をいただき、出資していただいた皆様に感謝いたします。